

関宿旅籠玉屋歴史資料館

現在は資料館になっているこの立派な古い旅館は、二階中央にある石膏細工の炎のモチーフのついた円窓のおかげで、容易に見つけることができます。もともとは現在の2倍の大きさだったこの旅館は、かつては現在隣に立っている郵便局の敷地にも広がっていました。関宿の三大旅籠のひとつであった玉屋は、一度に200人もの宿泊客を収容することができました。幕府の規則は東海道を旅する人の野宿を禁じていたため、街道沿いで旅籠を営むのは、確実な利益をもたらす商いでした。

一階の店の間には、階段に上がる部分の真上に数枚の木の板が飾られています。これらの「講札」は、資金を出し合って一人～数人の代表者を伊勢神宮への巡礼へと送り出すために結成された村の団体「講」の看板です。この宿の客室の大半は相部屋で、見知らぬ人同士や同じ講の人たちが大部屋で一緒に宿泊しました。

一階の東側に設けられた大きな台所には、煤に染まった壁と（現在はセメントで固められている）土間があり、天井は一番高いところで12mにもなります。また、（今でも使える）伝統的なかまどや酒や酢の瓶に加え、すぐ外には洗い物をするための井戸と石のタライがあります。台所のすぐ外にある小さな部屋には風呂桶も置かれています。

階段の上からは、炎の窓の裏側が見えます。（通常木造建築の近くに炎をモチーフにした意匠は置かれないものですが、この炎は幸運と繁栄を象徴しています）。客室に置かれている実際に使われていた布団や食器からは、玉屋が営業していた当時の様子がうかがえます。

本館と小さな庭で隔てられた奥の離れは、賓客が宿泊する場所でした。離れの床と天井は本館よりかなり高く、壁は鮮やかな黄色で、部屋と部屋の間には鶴と亀、兎と波、松梅竹といった伝統的な縁起の良い意匠が彫られています。離れの裏手にはもうひとつ大きめの中庭があり、砂利や石灯籠や立派な樹木がしつらえられています。関宿の本陣（primary inn）と脇本陣（secondary inn）はいずれも見学ができないため、かつてこの町を通過した身分が高い人の宿泊の様子を垣間見られるのはここだけです。

離れの向こうには蔵があります。蔵の一階は小さな浮世絵美術館となっており、その中には歌川芳虎（1836-1880）による京都（左側）から江戸（右側）までの東海道の名所を描いた12枚一組の作品も含まれています。絵に使われている強く際立つ赤色は、この作品が日本の版画家が輸入品の合成顔料を使い始めた明治（1868-1912）初期に制作されたことを示しています。東海道沿いの他の宿場町における典型的な風景を描いた他の浮世絵も展示されています。

二階には、関宿の色々な旅籠の古いモノクロ写真や、旅籠や商店の昔の看板、帳簿の紙で修理さ

れた玉屋の襖などが展示されています。

関宿旅籠玉屋歴史資料館の開館時間は火曜から日曜の午前 9 時から午後 4 時 30 分までです。関宿旅籠玉屋歴史資料館、関まちなみ博物館、関の山車会館の 3 館共通入館券を購入すると割引が適用されます。